

春夏秋冬

台湾徒然



第54回

七百万都市の出現

台湾人には密かな悲願があった。それは東京、上海に負けない「大都会」を世界に見せることであつたが、それは「質」のみならず、なにより規模が伴わなければならなかつた。

その夢がいに実現した。台湾になんとか700万都市を登場させたのである。

2010年度末に断行された地方制度改革は、辛亥革命百周年を銘打った「世紀の大合併」であつた。高雄県を高雄市に、台南県を台南市に、台中県を台中市にそれぞれ吸収合併させ、一つの市として合成し、さらに台北県を「新北市」に昇格させることで、もともとの台北市を含めて「五大都市」を出現させるというマジックだ。

昨年末にそれら五大都市の首長と議員の選挙がいつせいに敢行され、同時に新市制がスタートした。首都の両輪を構成する台北市と新北市の市長選挙はいずれも国民党、外省人候補が接戦

を制した。野党民進党は、次期総統候補のエースを立てて挑戦したが及ばなかつた。

五大都市には台湾全人口の6割、1300万人が集中し、名実ともに政治経済の核をなす。

例えば、新高雄市は面積が2946平方キロに及ぶ。日本の都市だったら断トツ第1位、広島市の3倍もの大きさをもつことになる。人口は277万人で台湾第2位。新台中市も、面積2215平方キロ、人口264万人で台湾第3位と、いずれも大阪市を上回り、都市の規格がいつせいに大陸並になつたともいえる。

そして台北県の地図から基隆市と台北市をくりぬいた部分が独立して誕生した「新北市」は面積2052平方メートルで東京都全体にほぼ匹敵。人口387万は、260万人の台北市を追い越して、台湾最大の都市に躍り出る。しかも、人口密度は和歌山市なみ



高層マンションの建設が進む新北市

なのであるから、これから、さらに人口増の余白がある。

この新北市と台北市、そして基隆市を含めて、台湾政府は「大台北」あるいは「台北都会区」と称し、一体化した経営をもくろんでいる。この「大台北」の人口は、およそ670万人に達し、一気に対岸の福建省都福州市を超え、さらに850万人の東京23区にも

肉薄する。

実は台北市の人口は減り続けていた。その原因は過密とともに不動産の高騰があつた。そして、板橋、三重、新店、淡水、新莊、中和、永和といった衛星都市との間に地下鉄網が整備され、人口の流出が進んでいたのである。

一方で政治都市として台北市の品格を保ちつつ、労働者層の周辺への拡散を進めていく。すなわち新北市と台北市は同じ台北圏に含められながら、そこには厳然とした線引きが存在している。

私自身もこうした政策に乗って、地下鉄の延伸に従い台北市内から現在の新北市に移住した一人である。生活環境はがくんと落ちるが、賃料は半額になつた。これからますます新北市への人口流入が加速していけば、「上海や東京ももう遠い存在ではない」。台北都会区の人たちの「Twitter(ツイッター)」はそう聞こえてきそうだ。

柳本 通彦

やなぎもと・みちひこ
ノンフィクション作家。著書に『台湾・霧社に生きる』『台湾先住民・山の女たちの聖戦』『タロキ峡谷の閃光』(以上現代書館)、『台湾革命』(集英社新書)、『明治の冒険科学者たち』(新潮新書)など。元日本軍人軍属の最後の声を綴った『台湾戦後65年』<http://www.taiwansengo.jp/>を更新中。